フォト・ドキュメンタリー「ＮＩＰＰＯＮ」２００５

対談：船戸太郎　×　土田ヒロミ

Guardian Garden
PRODUCED BY RECRUIT

●オブジェから郊外の風景へ

事務局：２週目の船戸太郎さんは、郊外のマンション群を俯瞰して捉えています。今日は、選考員の土田ヒロミさんと作品について伺っていきます。

土田：結構いろんな作品が集まりましたが、これは、「私」ではなくて、自分と時代の関係性を探ろうという写真を撮ることで、ＮＩＰＰＯＮが表現されていく、そういう新しいドキュメンタリーを若い人たちに期待した公募展なんです。船戸さんはベーシックな表現で、今の時代を写しているんじゃないかということで選ばれました。船戸さんは３４歳。お仕事は何をされているんですか？

船戸：カメラメーカーで、デジタルカメラのソフトウェア関連の職場で働いています。大学も理工系で、就職してからもずっと同じ職種ですね。

土田：なかなか忙しいと思いますけれども、その中で何故、いつ頃から写真を始めたんですか？

船戸：もともと誰でも持ってるように、二十歳くらいに買った一眼レフは持っていたんです。でも、上手になりたいというか……、２９歳くらいから撮るように。

土田：いわゆる趣味という域までもいかずに、記念写真とか、旅行の時に写したりですか。上手くなりたいっていうのは、何かきっかけが？

船戸：周囲はカメラに囲まれて写真的な環境ではあるので、いわゆるカメラ好きな人が多いんです。そういう中で、カメラより撮ることというか、写真って何だろうみたいな興味があって。

土田：ハードの問題じゃなくて、ソフトとしてのカメラって何なんだろうってことが気になりだした？

船戸：大げさにいうとそうなんですけれども。せっかくカメラ持ってるし。それに、写真がうまいってどういうことなのかなって。

土田：じゃあ、撮りだして、まず最初に手元にあった３５ミリで何を撮り始めたんですか？　具体的に対象としては、まず奥さんになる彼女を撮って……？。

船戸：そうですね（笑）。最初は形から入っていって、一緒に行った雑貨屋さんとか、お店に飾ってあるディスプレイとか、中華街とかは変わった看板が多いからそういうのとか。……でも、あとから振り返ってみれば、全然面白くなかったですね。

土田：だけどそれは、カメラを自分の手に慣れさせるという意味ではいい勉強だったんじゃないですか？　見る体験と撮る体験とで、できたものが違うことを、日常の中で学習していった。

船戸：そうですね、写真にしたらどうなるかっていうことを。でも雑貨の写真というよりも、雑貨そのものに興味があったんですよね。

土田：そう、オブジェに興味があったんだ。そういうもの撮りだして、そのあとはどんな風な写歴をとることになったんですか？

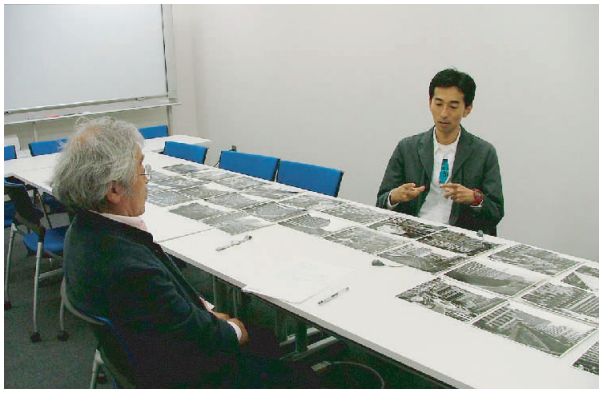
船戸：会社員だから時間が拘束されて、学校へは行けなかったんです。それで写真教室を見つけて、そこに通って、撮影会に行ったり。半年くらいたって、１９９９年に四谷にあったギャラリーの「モール」で金村修さんの第一回目のワークショップが始まったので参加しました。その前の教室の先生は「私は写真は５枚しか見ない」って言うんです、一回の教室で。それで金村さんの所に問い合わせたら「撮った写真は何枚でも見ますから、何百枚でも持ってきて下さい」って。そこから少しずつ、のめり込んで……。

土田：そこで写真を身近に学習、体験したんですね。それで「モール」で初めての個展をやったんだ。

船戸：はい。「Ｇａｒｄｅｎ　Ｃｉｔｙ」ってタイトル。今回のとは違ってマンションとかの建物はあんまりないんですけれども、もっと構造物とか、高速道路とか、郊外の風景でした。

土田：もうその頃から、郊外の俯瞰する、その「Ｇａｒｄｅｎ　Ｃｉｔｙ」的なものをシリーズ化してずっとやってきたんですね。

船戸：そのワークショップで雑貨屋とか中華街で撮った写真を見せたんですが、こういうんじゃなくてもっと身の回りを撮りなさいって言われて。中華街とかは自分にとって特別な風景だから、もっと特別なモノとかじゃなくて風景とかって。当時、川崎の宮前平に住んでたんですけど、宮前平って山が多くて、僕が２３、４の時にはほとんどが畑だった。見晴らしのいい所で結構見下ろせたんですよ。最初は交差点とか撮ってたんですけど、少しずつ、俯瞰の写真を撮ってるうちに面白いんじゃないかって言われて。



土田：経時的に、自分の目の前の風景がどんどん変わって行くっていう体験があった。まあ、どこまで自覚したかは別の問題として、時代の変化の中で生きてるなっていう、そんな感じがあって、より一層そのことを明確にする為に写真を撮り出したってことでしょうかね。

船戸：そんな大げさなものじゃないんですけど……。ただ、結果的にはすごい変わるんだなって。こんなに一瞬にしてマンションができるんだなって。テニスコートや月極の駐車場とかあったんですけれども、ほとんど全部マンションになっちゃいましたね。

土田：僕が今、船戸さんの作品を解説するような言い方をしましたけど、作者は自分のやっていることがよくわかってなくても、基本的にそれでいいと思います。評論家とか、見る人が解説したり、あとから考えてみればこうだったってことでいい。あんまり言葉化して、はっきりと解析してしまったら、撮るモチベーションがなくなってしまうから。だけど、はじめは分からなくても、作りながらそのことに気がついていくってことは必要だと思いますよ。どのくらいで、自分がやってることが時代を見つめる作業になってるんだと自覚したんですか？

船戸：そうですね……、多分１年くらいで。人に見せていくうちに、こういう風景ってあるんですねって言われると、ああ、やっぱり他では見られないんだって。

土田：郊外が都市化していく感じがね。

●視覚をフレーミングする

土田：船戸さんのこの作品の面白さは、社会現象としての問題というより、ビジュアル的なことだと思うんですけどね。

船戸：よくいう三次元のものを写真で二次元にする、その時に肉眼では見えてこないものが写ってくると思いますし、かつモノクロなので、色を取り除いた質感、景観がやっぱり面白いですね。

土田：写真を撮るっていうのは、一つの大きな特徴としては、視覚をフレーミングするということがある。風景の一部しか見ないってことですからね。ここに立って風景を眺めてる時にはそんなに自覚してないかもしれないけれど、フレーミングすることで初めてこの空間性みたいなことが意識されると思う。我々はこの写真を見る時に、限定された空間をなぞっていくわけですが、そうするといろんなものが見えてくる。実際に現場に立った時ってなかなかなぞる作業ってしないですよね。

船戸：あんまりしないです。

土田：そう、できないですよね。現場でなぞるほど対象を舐めるような視線って、なかなか持てないんですけれども、写真にすることでそういう視覚が発生する。現場で肉眼が見逃してる様々なディテールや空間が見えてくる。そういうプロセスを、あなたは撮ってプリントしていく過程の中で面白がっていたんじゃないですかね。

船戸：フレーミングすることによって、逆に広がりを見せたいというか。空間的広がりを意識するというか。

土田：最初のオブジェを撮ってたところから、この建物をオブジェとして撮っていくんじゃなくて、空間を主体に撮る、そんなふうに視線が全く違うところに来ましたね。割と早くここに来られたのは先生が良かったのかな。さて、ここに写っているのはどの辺が多いんですか？

船戸：場所は都筑区とか、横浜。田園都市線沿線とか、多摩ニュータウン。あと、千葉ニュータウン。

土田：情報としては、大きな団地をピックアップして、あとは地図ですか。このあたりに登ればいいはずだって、だんだん分かる様になってくる。このポイントに上がってみようみたいな探し方かな。

船戸：そうですね、だいたい地図で分かってきます。でも、登って降りて、登って降りてって感じです。怪しまれながら。だから申し訳ないので、さーっと行って撮ります。

土田：地図っていうのはスペースを二次元で表現してる訳ですけれども、その地図を見ながら実際に、ここの場がどんな風景として立ち上がるかっていうことを予感しながら、そこに立つ訳じゃないですか。そういう二次元の地図を三次元化して読みとり写真化していく、そんな面白さがあったんではないですか？

船戸：……それはないですかね。地図を写真に意識したことはないかも。たどり着く為の道具ですね。

土田：そうですか、地図は便宜的なものだけなんだ。

●モノクロームの面白さ

土田：もう一つ大事な要素として、モノクロームにしたことについてはどうですか？

船戸：オブジェの頃は普通にカラーで。モノクロは自分でプリントできるのがいいですね。それに、今みたいにデジカメは、あんまりクオリティが良くなかったんで。

土田：手の内で作業できるって、そりゃ面白いことだよね。撮ったものが仕上がっていくプロセスは喜びですよね。

船戸：ええ、色を引いた時の面白さを感じたから、ずっとモノクロで撮っていこうって思ったんです。

土田：色っていうのはモノクロの立場ではノイズとも言える。例えば、ここが真っ赤だとすると、空間を見ようとした時それが邪魔になることが当然起きてくる。抽象性を持っているモノクロで、あなたが郊外に展開している都市化の空間を面白がったということですね。

船戸：色では感じられない、色がなくても感じられる木やコンクリートの質感とか。その距離感。色はなくなったが故に見えてくる距離感っていうのがあります。

土田：むこうの方の黒の濃度と手前の方の黒の濃度、そういうことが距離感を出してくるんだけど、単色で、そういう多様な表現をすることの困難さが面白いところ。シンプルですけどね、色が入ってくるともっと複雑になってくるから。

船戸：そうですね。また選ぶ写真も変わってくると思います。

土田：色の要素を生かしながら撮らないといけないから、当然これとは違ったものになっていくでしょうね。あと、「カメラとは何か」って、一番最初に言っていたけれども、カメラが人間の目、つまり自分を超えて写してくれる、そのことを面白がってるところもあるんじゃないですか。例えば、ここのタイルの素材感を、焼きながらどう出すか。写ってるものを少しずつ焼き出していくとき、人間というか、自分を超えてあるものに見えていく、そのことが面白いんでしょうね。

船戸：面白いですね。撮影の時はやっぱりそこまでは見えてないし、気づいていないし。

土田：もう一つ、デジタル映像が成立しつつある時代に、特にあなたはデジタルのソフトを作ってるんですよね？　自分の作品と反対の仕事をやってるんだけど、そのことは？

船戸：身近にデジタルがありすぎて、例えば、毎日会社でデジタルカメラが目の前にあるんで、リフレッシュの意味でも、プライベートではアナログ的なことを楽しみたいです。やっぱりモノクロの作業って水で洗ったり……。

土田：立ったり、座ったり、身体的な作業がより大きいよね。モノクロは、自分の体にしみ込んじゃうみたいな作る喜びがある。

船戸：大きいですね。それも続けられた理由かもしれないですね。

土田：非常に近い世界にいながら、背を合わせながらやってる、それはいいことかもしれませんね。原点っていうか、写真のオリジナルなものを持つモノクロを、身体的に獲得してるってことは、デジタルソフトを開発していく上で、大変なプラスなことかもしれませんよ。フォトショップを使うのに、暗室作業が上手な人ほどうまいと思いますけど、それと同じようにね。

船戸：そうなんですよね。あんまり仕事とくっつけたくはないんですけれども、でもどういう形でかは繋がりますね。やっぱりこっちが基本になってるっていうか、ベーシックなものなんで。

●集合住宅のこれから

土田：作品に戻りましょう。大きな問題として、なぜ郊外かということ。それはあなた自身が住んでいたというのも大きいですが、撮り進んでいくうちに、「何故Ｇａｒｄｅｎ Ｃｉｔｙを撮ってるんだろう」っていうことを自問しながら撮っていたと思いますが、それはどうですか？ 団地は、住宅であることには変わりないんですが、どういうものなんだろうと考える様になりました？

船戸：今回、団地というかマンションの写真を並べたんですけれども、これだけ並べていくうちに、やっぱり……ここに生活するってどういうことなのかとか、これからどうなっていくんだろうって思います。街というか生活が。

土田：確かにこれだけの人工的なものが作られてきたんだから、これは経時的に大きく変化していくんだろうって予測されます。

船戸：僕が生まれ育ったのが埼玉で、ほんとに群馬との県境の田舎だったから、あまりこういう高層のマンションってなかったんです。あとは、住んでる人は自分の家を外から見たことがあるのかなと、そういうことは思います。例えば一戸建てに住んでいれば、自分の家を外から見えるから、毎日帰る時に見る。でもこういう高い所に住んでる人は、自分の部屋を見てから入っていくというよりは、どこかに入り口があって入っていくみたいな。たどり着くというか……。

土田：そういうことに現代を感じたってことかな。あまり人が写っていないんですよね。意識的に排除した？

船戸：写ってはいるんですけれども、できるだけさけています。人や車が通ってる時はあまり撮らないようにしてます。そっちに目がいっちゃいますし。被写体として、やっぱり人のフォルムって強いですから。

土田：強いよね。どんなに小さくても見えてしまう。すると写真は、とたんに状況説明になってしまう恐れがある。ところで、いわゆる郊外団地が出来だしたのは戦後何年くらいだと思います？

船戸：僕が生まれる前ですかね。１９７０年……。

土田：ちょうど70年くらいから出来だしたんですよ。あなたが生まれた頃ですね。人が地方から都市へどんどん集まってくると、スペースとコストの問題で都市の中で吸収しきれない。そうすると周辺に住空間を作って、都市と交通機関で結ぶという形で。

船戸：ベッドタウンですね。

土田：そう、それで効率よく集合住宅になっていった。人間が他の動物と違う所は、組織や集団で生きるということ。一番小さい集団は家族で、そして家族どうしが付き合ってまた一つの集団を作る。そのようにスペースを広げていくんですが、ビル型の集合住宅になると、複数の家族が一棟に入っちゃうんだけど、集団としての結びつきは脆弱になった。自治会活動はあっても、共同体は成立しないで擬似的な街になって、実態としては人間の相互のコミュニケーションはなかなか成立しなくなってしまった。そして、今あなたは、社会科学的な視点として考えた時に、今後これらの団地がどんな状況になってきてると思います？

船戸：……確かに例えば新築のマンションでは、近所付き合いは最初からないような気がしますね。防音の問題も最近はしっかりしてますし、隣や上の階の人がうるさいって時だけ、ちょっとコミュニケーションがあるかもしれないけど、基本的にはあまりないと思う。人との繋がりで言えば、インターネットで、近所に住む人の、例えば小さい子供を持つお母さんであれば、そういうお母さんの掲示板がもしその地域にあれば、その掲示板を経由してコミュニケーションが出来てくる。

土田：まさにデジタル社会だね、そうなってきてますよね。

船戸：インターネットの繋がりの、その距離の近さが、付き合いというのをなかなか意識しなくなってきてると思います。あと、昔は隣近所との付き合いがあって、隣の家のことが気になったかもしれないんですが、今はそれより自分の部屋の窓の目の前に、例えば、いきなりマンションの建設の話がくれば、どのくらい日が射すんだろうとか、送電線が立てば電磁波はどのくらい影響を与えるのかとか、そういう方が生活の上で気になってくる。

土田：そんなふうに濃い空間をシェアして生きている人たちは、人間関係が非常に粗になって、むしろデジタル家電を通してのコミュニケーションするかたちになっていくんだと思います。それで、実際にこういう場所で現在起きてることは、今子供たちが成人し、独立して出ていっているということ。残ってるのはもう老人しかいない。何千万円だかローンが終わる頃に老齢化して、ここでコミュニティーができるはずだったのに、それも出来ずに崩壊に向かってる。そういう問題を抱え込んできている空間だと思うんですが？

船戸：定期借地権でしたっけ、要するに期間限定で土地を貸してそこに高いマンションを作るんですけれども、５０年とかで土地の権利がなくなるんで、そのマンションはとり壊されることになっている。つまりその世代で終わってしまって、また壊して新しいマンションを建てて、新しい人たちが入ってくる。だからずっと続いていく場所じゃないんですよね。

土田：個人的には、こういう場所が今までとは違って、現代の象徴としていろんな問題を抱えてる場所としてとらえると面白いんじゃないかと。今までのこの種の写真を見ると、人工空間としての面白さが中心で、そういう意味での視点ではまだ撮ってないし、実際にはあまりに急激な変化のため撮れなかったんだろうと思います。こういう田園が都市化していったことの結果として、様々な問題をもう一回抱え込んでしまっているんですよね。こういう場になってきてしまっているということを意識化して、１０年、２０年後ぐらいに長い目で、もう一回考えるといいのではないかと思ってます。

船戸：はい、基本的に風景の写真は好きなんで、マンションだけに限らず、続けていきたいと思っています。今のところは同じ様な風景を撮ってるんです。今後も、特にこれというのはないんですが、面白い都市風景が撮れればいいなと。

土田：２９歳で写真を始めて、いよいよ写真の森の中に深く入ってきてしまって、生活の中でのウエイトが大きくなってきているんでしょうか。あなたの人生の中で写真っていうのをどんなふうに位置づけられるのが一番ハッピーなんですか？

船戸：撮り続けていいのができたら発表するってのが……つまり作家ですね。人に頼まれるのではなくて、自分の好きにやっていたいですね。

２００５年５月２０日（リクルートＧＩＮＺＡ７ビル）